5 長野県におけるこれまでの衛生動物への対応と今後の課題 ○内川公人・岩坂正弘(松本市) Studies and practices in medical zoology in Nagano Prefecture and further problems in this field. ○Kimito Uchikawa and Masahiro Iwasaka (Matsumoto, Nagano Prefecture)

長い間、長野県では各郡が競って郡誌を著していたが、そのなかで郡内のファウナが例外なく記録された。今でいう衛生動物の記録が残されていることも少なくなかった。ここで、資料の収集は伝統的に市町村立学校の先生方が担当することになっていた。これらの方々によって、多彩な衛生動物学的な調査や研究もなされた。さらに、土地柄から、県外の研究者の調査研究に委ねられるところも大きかった。やがて、信州大学に医動物学講座が開設され、県下における斯学の普及がはかられた。別の演者が取りあげる衛生動物とは別種による人体加害例があり、そのような症例があることを知る度に、症例報告をすることを奨励してきた。しかし、近年、ネコノミとヒトスジシマカによる刺咬例が県下で新たにみられるようになり、これらの種類の系統的な調査を追加すべき段階にありながら、県下の研究態勢を再編成しなくてはならない状況に陥っている。

2 浄水場ろ過池に生息するユスリカ幼虫数の季節変動 ○松澤みちよ¹⁾・谷崎樹生²⁾・中本信忠¹⁾・平林公男¹⁾

1) 信州大・繊維・応生、2) 石垣島ウミガメ研究会

Seasonal abundance of chironomid larvae in slow sand filter bed Matsuzawa M., Tanizaki S., Nakamoto N. and Hirabayashi K.

これまでユスリカ類の生息場所としてあまり知られていなかった浄水場内のろ過池に生息するユスリカ類について報告する。浄水場のろ過池は、河川や湖沼などの自然の生息場所と比較して、極めて高い密度でユスリカ類が生息しており、ユスリカ個体群維持機構解明の研究フィールドとして、近年、特に注目されてきている。調査対象とした浄水場は河川水をゆっくりとした早さで砂層を通過させ(ろ過)、飲料水を作る緩速ろ過方式で、砂層表面に生物膜ができ、それが浄水に重要な役割を果たしている(生物処理)。本研究では、内陸性気候帯にある上田市染屋浄水場と亜熱帯性気候帯にある石垣浄水場とで月1回、試料を採集し、砂層表面のユスリカ幼虫数を計測した。ろ過池の使用日数は、染屋で28(春期)～44(夏期)日、石垣で43～50日の範囲であった。いずれのろ過池でも春は幼虫の生息密度が低く、夏に向けて密度が高くなっていった。また、石垣浄水場の方が、染屋浄水場に比べ、幼虫密度が20000匹/m²以上に達するまでの期間が短く、これには水温が関係していると思われる。

一般講演

1 諏訪湖におけるユスリカ類幼虫の水平分布について

○安藤誠¹⁾・花里孝幸²⁾・中本信忠¹⁾・平林公男¹⁾

1) 信州大・繊維・応用生物

2) 信州大・山地水環境教育研究センター

Distribution of benthic macroinvertebrates of Lake Suwa

Ando M., Hanazato T., Nakamoto N. and Hirabayashi K.

近年、諏訪湖からのオオユスリカ、アカムシユスリカ成虫の発生量が減少傾向にあることが報告されている。本研究ではユスリカ幼虫数そのものが減少していることが大きな要因であると考え、2001年3月に湖全体にわたる個体数調査を行った。調査地点は湖全体に設け、500m間隔に全60地点を設置した。エクマンバジ探泥器で1地点3回の探泥を行い、この時同時に水深、底泥温、底泥直上の溶存酸素量を測定した。なお、底泥表層の一部は実験室に持ち帰り、灼熱減量の測定に供した。その結果、水生貧毛類が148.1～1881.5匹/m²(平均:814.3±396.5匹/m²)、オオユスリカ幼虫が0～59.3匹/m²(3.2±9.4匹/m²)、アカムシユスリカ幼虫が0～207.4匹/m²(73.3±48.0匹/m²)であった。1986年の同様の調査では、ユスリカ類の幼虫は湖全体に分布しており、沿岸部と水深の深い地点では密度が極めて高かった。しかし今回の調査では、諏訪湖全体でユスリカ類の幼虫数の減少が著しく、密度の高い地点で比較してもオオユスリカで1/20、アカムシユスリカでは1/50に減少していた。

3 日本産 *Ablabesmyia* (ダングラヒメユスリカ属) の分類 小林 貞(環境福祉研究所) Classification of *Ablabesmyia* from Japan. Tadashi Kobayashi

多くのユスリカ成虫の同定がそうであるように、ダングラヒメユスリカ属も、属の同定はきわめて容易である一方、種の同定はかなり困難である。日本各地で採取された本属雄成虫のスライド標本100余をもとに、詳細な形態観察を行い、分類を試みた。その結果、「種」としての特徴は、交尾器、とりわけ aedeagal blade の形態に集中していて、他には、決定的な「種」としての違いを発見できなかった。そこで、主に aedeagal blade の形態をもとにして *A. monilis*, *A. longistyla* そして *A. sp. nov.* (投稿中) の3「種」を識別できた。